南の国のナデシコ税理士

成功へのキセキ

第71回 管理会計をもっと身近なものに！

おかげさまで、『マンガでわかる管理会計』、出だし好調です。ありがとうございます!

管理会計の本を書きたいなー、と思ったのは、ヤンゴンに会計事務所を開いたのが、きっかけです。

2012年、初めてミナミの国の会計に触れたのは、中小企業庁が企画した、ミャンマーと日本の中小企業同士のビジネスマッチングの時でした。私はミャンマーの会計と税務について、何度も何度も質問しましたが、その場にいたお偉いさんの誰ひとり、明確に答えられる人はいませんでした。

セミナーが終わったあと、ミャンマーで20年ビジネスをしているという方から、耳打ちされました。この国でまともに帳簿をつけている会社はないし、税金を払ってる会社もないから、聞かれても誰も答えられないんだよ。ここに会計事務所がやるような仕事はないから、進出しようなんて考えないほうがいいよ、と。

天の邪鬼なわたしは、反対されてやる気スイッチに火がつき、その１年後に現地法人を立ち上げるのですが…。さー困った。税務や会計に関する情報を入手する術が、全くありません。当時はインターネットなどもほとんど使えず（基地局がない）、ググることもできませんでした。

ミャンマーに知り合いは一人もいません。唯一の頼りは、前述のビジネスマッチングで名刺交換した人たちです。幸いなことにそのうちの一人、すでに１年前からミャンマーに進出していた飲食店のオーナーと仲良くなり、その会社の帳簿を見せていただけることになりました。

経理として雇っていたミャンマー人女性は、20年以上のキャリアがあるというベテラン。彼女が日々つけていたのは、エクセルの帳簿でした。彼女曰く、誰が作ったものかは分からないけど、ミャンマーの会社はほとんどが、このエクセルを使っていますと。

なるほど、なかなかに良くできたエクセルで、日々の売上や費用などを入力していくと、自動的に勘定科目ごとの別シートに数字が飛ぶので、これを元に損益計算書を作成することができます。

ただ、この帳簿には大きな欠点が２つありました。１つめは、当時のミャンマー人たちは、エクセルの使い方をよく知らないということでした。勘定科目ごとに自動的に飛んだあとのシートには、肝心のSUM関数が入っていません。そこで、ベテランの経理ウーマンは、売上や仕入、通信費など勘定科目ごとにシート分けされたエクセルの合計額を、電卓をたたいて集計していたのです。

２つめは、そのエクセルが複式簿記に非対応で、単式簿記を基に作られているということでした。相手科目は現金という設定で、未払金の計上ができないので、お酒の支払や電気代など翌月払いのものは、どうしてるのか質問したのですが、彼女は領収書を見せて、（エクセルに入力した）数字は間違えてないと、主張するのみ…。

気を取り直して、では在庫はどうやって（損益計算書に）反映させるのかを聞くと、今度は細かく商品名と数量が記載されたノートを持ってきて、説明してくれます。

いや、それは単に納品を確認しているだけで、どれだけ在庫が残っているか分からないと、会計には落とし込めないでしょうと言うと、自分は悪いことはしていないと、必死で訴えてきます。どうやら、不正を咎められていると勘違いしているような…。

そうじゃないの、期末在庫を資産計上しないと、正しい損益は計算できないでしょ?と、いくら説明しても、ベテラン経理ウーマンと話は噛み合わず、コミュニケーションは成立しませんでした。20年のキャリアがあっても、彼女は複式簿記を知らなかったのです。

ミャンマー進出を成功させるために、現地の会計事情を知るのは最優先課題です。すると運良く、ヤンゴンでアカウンティング・スクールを運営しているミャンマー人と知り合うことができました。

ミャンマー人は本当に親切で、日本から単身やって来たジャパニーズCPTAに対して、どこへ行っても、フレンドリーに接してくれます。話を聞きたいと言えば時間を取ってくれるし、彼らの授業を見学したいと言えば、いつでもウェルカム。当時、ミャンマーで唯一出回っていた会計ソフトの存在や入手の仕方、その使い方も彼から教わりました。

ミャンマー進出にあたっては、たくさんの素晴らしい出会いに恵まれたと感謝していますが、そのスクールを経営するアカウンタントとの出会いは、間違いなくヤンゴン事務所の基礎を作ってくれたと思います。

◆筆者 原 尚美（はら なおみ）プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練（現：全国公開模試）「財務諸表論」「法人税法」で全国1位の成績を収め、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性のスタッフ約30名の規模にまで成長。一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に『小さな会社の総務・経理の仕事がわかる本』『小さな起業のファイナンス』（いずれもソーテック社）、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方（日本実業出版社）』『トコトンわかる株式会社のつくり方（新星出版社）』『世界一ラクにできる確定申告（技術評論社）』『一生食っていくための士業の営業術（中経出版）』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

というわけで、これまでは謎だったミナミの国における会計のヒエラルキーが分かりました。

トップに立つのは、CPA。これは本当に一握りの人しかなれないもので、司法制度改革前の日本の弁護士に近いイメージでしょうか。CPAは、人々から尊敬され、畏れられる存在で、当時（今は違うようですが）、青いボールペンでサインできるのは、CPAだけだと言っていました（海外では、公式文書には青いインクでサインをする国も多い）。

その下に位置するのが、ACCAのタイトルを持つアカウンタントです。ビジネススクールを経営していたアカウンタントも、この資格を持っていました。ACCA（英国勅許公認会計士）は、イギリスで設立された団体が付与する資格で、日本ではあまり馴染みがありませんが、世界180ヵ国以上で採用されている権威のあるタイトルです（その頃は私も、全く知りませんでした）。

イメージとしては、USCPAに近いものですが、このタイトルを取るのは、容易なことではありません。USCPAや日本の税理士試験と同じように１科目ずつ取ればよいのですが、科目数が半端なく多いのです。ACCAはパート１からパート３まで分かれており、全部で13科目。イギリスの資格なので、テキストも本試験も全て英語です。

ACCAのタイトル、とくに最上位のパート3-2を持っている人は、やはり一握りしかなく、ミャンマーでは、CPAに次いで尊敬を集める存在というわけです。

その下の資格として、LCCIがあり、これもイギリス由来のタイトルですが、こちらは比較的簡単で、日本でいうところの日商簿記３級レベルあたりかと思います。良いウチのお嬢様が外国語大学などを卒業する前に、教養のひとつとして取っておきましたという感じのもので、実感としては、LCCIの資格を持っていても、日本企業が期待するいわゆる仕訳は全くできないレベル。

こうして、ミャンマーで経理スタッフを雇うにはACCAの資格が必須だということがわかったところで、ACCAのテキストや授業風景を見せてもらうことになりました。そこで、私はちょっとしたカルチャーショックを受けたのです。ミャンマーで会計人を目指す人たちが学んでいたのは、財務会計ではなく、管理会計やファイナンスだったからです。

複式簿記の仕訳は、単なる職人がやる仕事に過ぎない（と言われたわけではありませんが）。自分たちが学んでいるのは、真のビジネスパーソンとして生涯活躍するための長期的で総合的な資格だ。そんなプライドが、ひしひしと感じられました。

実際、日本に留学したことがあるというACCAのアカウンタントから、日本人は管理会計を知らないので、びっくりしたと言われる始末…。当時、日系企業はミャンマーの会計レベルを馬鹿にしていましたが、とんでもない、大きく「会計」という括りで見た時、レベルが高いのはどちらなんだろうと、考えさせられてしまったのです。

というわけで、会計の専門知識がない人にも、もっと管理会計に親しんでほしいと思って上梓したのが、『マンガでわかる管理会計』です。

どうか、ポストコロナを生き残るために、役に立ちますように!

好評発売中

マンガでわかる管理会計：はじめてでもわかる儲けのからくり

原 尚美／著、鎌尾こんぶ／作画、ウェルテ／制作　（オーム社）　2,000円+税

利益を生みだす管理会計のしくみと基本が、マンガで楽しくわかる!

本書は、お菓子づくりは天才だけど、めっきり数字に弱い父親の和菓子会社を経営の危機から救いたいと、女子高生の桃子が税理士の百合先生に管理会計を教わるストーリー形式の入門書です。

管理会計とは、会社のありのままの状態を把握し、収益やコストの構造を分析し、未来の利益を予測するためのノウハウです。ポストコロナを生き残るためには、数値に基づいた科学的な経営が求められます。経営者やリーダーの責務は決断です。管理会計は、意思決定の場面で、最善の道を示してくれる唯一の拠り所といっても過言ではありません。

値引き戦略とおまけ戦略はどちらが得か、外注と自社生産はどちらが得か、切り捨てるべき商品と力を入れる商品の見分け方など、経営の意思決定の場面で主人公の桃子と一緒に、ハラハラドキドキしながら、楽しく実践的に学べる本です。